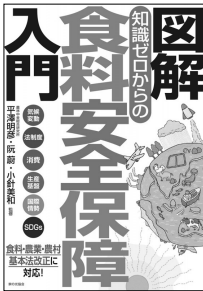




●書籍のご購入や内容等については最寄りの書店や発行元にお問い合わせ下さい



『図解 知識ゼロからの食料安全保障入門』

平澤明彦・阮蔚・小針美和 著

家の光協会 刊

定価 1,980円 (本体 1,800円＋税)

“食料安全保障”という複雑で、消費者の認知度が低く、多面的に点在し、政策議論に偏りがちな概念を明確に捉えるのは難しい。

そこで、食料安保を正しく理解し、それを軸とした地域農業の振興を推進するために本書の一読をすすめたい。農林中金総合研究所が食料安保の概念と国内外における農業・貿易政策の最新情勢をわかりやすくまとめ、日本の課題解決の道筋を示している。食料安保を脅かす輸出大国との貿易や気候変動など、日本が主体となって動くことができない外的要因の強大さも痛感させられる。最終章では消費者による農業参画の意義も説いている。農産物を買ひ支え、消費行動で農業環境を守る消費者がそれを自覚し、当事者意識を持って農業を支えるようになれば、食料安保への実現に近づくと明示する。

本書が日本農業のリスクとして指摘するロシアのウクライナ侵攻や米

中対立、地球温暖化の進行などにより、25年ぶりに改正された食料・農業・農村基本法には食料安全保障の強化が織り込まれた。また日本政府は、今年4月に国内の食料危機への対応を定める食料供給困難事態対策法を施行した。異常気象などで米や小麦といった特定食料が不足する恐れがある場合には、深刻度に応じて生産できる農家へ増産要請や生産計画届け出の指示を行うこととした。

食農環境はかつてないほど注目され、議論を呼んでいる。そして、食に対する考え方、国際情勢の捉え方、貿易に対する意見、政府への信頼など、多くの場面で人々の意見が分かれ、社会では分断を招きかねない状況にもなっている。そんなときだからこそ、農業関係者である私たちが本書を通じて農業と食料安全保障の関係を整理し、様々な示唆を得て、私たちの生活のどういった場面に食料安保の危機の影があるのかも認識し、地域に広めていくべきだと考える。

(日本農業新聞 さいとう はな 齋藤 花)